

日本三大奇祭のひとつに数えられる「裸祭り」。

西大寺会陽。

その後祭りで、自分の身体ほどもある大きな筆を自在に操るひとりの女性。

書き上げた文字は「命」。

岡山県中区に住む、書道家・吉田綾舟（よしだりょうしゅう）さん。

吉田さんが書道と出会ったのは44歳の時。

伝統的な書の技法を超越し、自由な発想で表現する「前衛書」に魅せられました。

（作品「胎動」）

（作品「龍」）

古典にある漢字をベースに数多くの作品を生み出してきました。

時には、書と絵画の境界線を越えたものも。

（作品「万葉集・坂上郎女誌」）

「これだ！と思ったものを表現したい。それには、必ず線を引いたら、その線になるためににはリズムと呼吸がシンクロしないと絶対にならないんですね。」

「そのシンクロした時がめちゃくちゃ気持ちいいんですよ。」

2017年に書いた「飛ぶドラゴン」。

（作品「飛ぶドラゴン」）

世界から高い評価を受け、来年ニューヨークで開かれる書道の展覧会に出品されることになりました。

表現したのは、中国・周王朝時代の青銅器に刻まれた区切りの「区」という文字。

新しい自分に生まれ変わりたい、そんな思いを込めました。

「よし！今までの自分と違うんだ！と思って、区という文字を書いたんです。」

「最初のストロークというのかな、一画目でパーンと跳ねたんですね、うまいことそうなりました。」

「自分としては気持ちよく書いて、自分は変わるんだって思いました。」

吉田さんは学生時代インドへ留学。

結婚後は夫の仕事の都合で4年間ロシアで生活するなど、海外経験が豊富です。

日本とロシアの友好イベントに参加したり、世界三大バレエ団のひとつ、ボリショイ・バレエと共に演するなど、異色の経歴を持ちます。

書道を始めて25年、吉田さんは後身の育成にも力を入れ、今では8人の弟子がいます。

そのうち4人は外国人。この日はフランスの弟子、ブルーノ・プレシェミエさんが友人3人を連れてやって来ました。

書道は初めてという3人に、吉田さんは筆の使い方や線の書き方を教えます。

「筆を置いて、筆を斜め45度に開いて、筆が開いているのを感じて、最後に筆を斜め45度に上げます。」

呼吸とリズムで線を引く。

吉田さんの教えもあり、およそ2時間ほどの稽古で文字を書き上げました。

（作品左から「熊」「悦」「和」「催眠」「熊」）

「おもしろい。書道は初めてだが、筆を動かしている時に瞑想のような感じがしました。同時に、自分の感情が乗ると感じました。」

弟子のブルーノさんは、催眠療法で潜在意識に働きかけ、心の問題やストレスを軽減する専門家・ヒプノセラピストとして活動していて、書道をヒプノセラピーとの関係を解説した専門書も執筆しています。

「ヒプノセラピストだから薬の勉強はしましたが、芸術の勉強はしたことがありませんでした。初めは難しかったですが、先生のおかげで

少しづつできるようになりました。書道が好きになりました。」

「はい。」

「ここを見て下さい、ここが中心ですよ。よく見ないといけませんよ。」

普段はタブレットを使いリモートでの稽古ですが、この日は師匠の直接指導を受けることができました。

「簡単ですか？」

「いいえ、難しい。」

自分自身の感情、生き様そのものを文字に映し出す「書」に関するあくなき探求心が衰えることはありません。

「無意識の中でお互いに結び合えるほどの人間としての共通項があると思うんです。それを表せるのが本当の芸術だと思います。」

「悲しみや楽しみ全て含めて、自分をその時その時によって合わせて表していくらしいなど、自分では思います。」